

3月(弥生) 暦

1日(日) 月次祭(午前10時)
3日(火) 桃の節句(雛祭)
6日(金) 啓蛰
11日(水) 月次祭(午前10時)
18日(水) 彼岸入り
21日(土) 春分の日
月次祭(午前10時)
物故職員春季慰霊祭

靖 國

〈発行所〉靖國神社社務所
〒102-8246 東京都千代田区九段北
3丁目1番1号 ☎03(3261)8326
<http://www.yasukuni.or.jp/>
発行人 徳 川 康 久
編集人 樋 口 知 明
定価1部100円・年間1200円送料共
(会員の購読料は会費に含む)
振替 00190-1-46710 番広報課

第 7 1 6 号

明治天皇御製

待 花

(明治四十四年)

ただひと日あたたかなれば櫻花
さきもやするとまもらるるかな

〔三月拝殿掲示〕



早春の天空を飛ぶ白鳩

靖 國

内苑神池に建つ茶室の一つ靖泉亭の露地には、境内で唯一雪吊りが施された赤松がある。その赤松にもうつつすらと雪が積もり、神池の錦鯉は石橋の陰に寄り添うようにじっとしている。白鳩は寒風が吹き抜ける神門の上を飛び回り、参拝者を迎えている。▼平成九年八月の社報の特集「靖國の白鳩」には、平成四年に四個の「鳩笛」を奉納された北白川祥子さまの思い出が綴られている。昭和十年、北白川宮家第四代永久王は、徳川義恕男爵の次女祥子さまと御結婚された。その御輿入れの日、愛鳩家である義恕氏は、嫁いでゆく愛娘へのはなむけに、飼育していた伝書鳩の背に鳩笛を付けて飛ばされたという。近衛騎兵に守られて馬車で御実家を出立される時に聞いたその鳩笛の音を、祥子さまは「今でも、はつきりと覚えています。」と述懐されている。▼昭和三十三年一月、沖縄全戦没者の追悼式に参列の為、筑波宮司と共に米国施政下にある当時の沖縄に渡航し、戦跡を巡拝された祥子さまは、御出発前に「沖縄の島に散りにし御霊をばいざ出で行きてなぐさめまつらむ」「和歌集(沖縄縣全戦没者追悼式に際して)」とお詠みになり、同年の御創立記念日祭は博愛の兼題で「沖縄の嶋におくらむころひろき恵みの波に幸をのせつつ」と献進されている。▼北白川祥子さまは一月二十一日、九十八歳の生涯を閉じられた。終戦直後の厳しい状況にあった靖國神社の「崇敬者総代」として、また「奉賛会会長」として多大な御尽力を戴いた。心から哀悼の意をお捧げ申し上げる。▼遊就館では三月二十一日から特別展「大東亜戦争七十年展最終章」が開催される。平成二十四年から三年に亘り開催してきた大東亜戦争七十年展の最終章として、昭和十九年の本土防衛戦から硫黄島作戦、沖縄戦、本土防空戦、終戦に至るまでの展示である。是非とも御拝観戴きたい。▼もうまもなく櫻の蕾も膨らみ鯉も泳ぎ始める頃となる。春はすぐ隣にある。

真の近現代史を知り、 祖国に誇りを取り戻せ



元谷 外志雄
(アバグループ代表)

毎年終戦記念日には靖國神社へ参拝しているが、昨年の終戦記念日はこれまでにない数の参拝者で溢れ、特に若者や女性の姿が目立った。百田尚樹氏の著書『永遠の0』が大ブームとなり、さらにこれが映画化されたことによっ

て、これまで戦争や特攻に対して無知、無関心であった人々が、先の大戦の意義や、特攻隊の方々の祖国や家族への強い思いを知り、英霊に対して尊崇の念を感じて靖國に参拝するようになったと思われる。戦後の自虐史観から覚醒し、自ら歴史の真実に目を向けようとする若者が増えて

きたことは、大変喜ばしいことである。

今年で戦後七十年を迎えるが、アメリカによる巧みな占領政策と、それを受け継いだ戦後敗戦利得者である反日日本人によって、戦後一貫して歴史の真実は歪められ、自虐史観に基づく教育と反日報道が行なわれ、戦後の日本人の中に、自虐史観が植え付けられた。私はこの自虐史観の呪縛を解き、「誇れる国、日本」の再興を目指すため、二〇〇八年に「真の近現代史観」懸賞論文制度を創設し、第一回の最優秀賞に当時現役の航空幕僚長であった田母神俊雄氏

が受賞したことが大きな話題となった。田母神氏の「日本は良い国だった」と主張した論文は、「現役自衛隊幹部が政府見解に反する論文を発表した」としてメディアのバッシングを受け、末期的状態にあった麻生自民党政権によって田母神氏は更迭されて自動的に退職に追い込まれた。当時と今日とを比べると、この六年間で歴史認識や祖国に対する誇りという点で、世論に大きな変化が起こったと感じている。竹島・尖閣問題で多くの国民が憤り、第二次安倍内閣が誕生し、『永遠の0』ブームが起こったのも、田母神氏の登場をきっかけとして、日本の保守化が進んだからではないかと見ている。

一八五三年六月のペリー来航からの日本の近現代史を振り返ると、当時既に世界の多くの地域が西欧列強の植民地にされ、その波がヨーロッパから最も遠い「極東」にまで及んできたことに対する危機感の中で、日本が独立国家として存続していくための戦いの連続だったと言える。当時の日本の知識階級達は長崎の出

島のオランダ人を通じて、アフリカ、中南米、アジアなど有色人種国の植民地化、アヘン戦争後の中国の悲惨な結果などを聞き、最後の有色人種の独立国日本が植民地化されれば、有色人種の世界はこの先数百年にも亘って植民地支配を受け続けてもおかしなという危機感を持っていたのである。朝鮮半島の独立を巡る日清、日露戦争を経て、日本は列強国の仲間入りを果たしたが、日本が白人国家口シアを破ったことは、植民地支配を受けていた有色人種に大きな希望を与えた。さらに一九一九年には、日本は国際連盟において、人種的差別撤廃を連盟規約に挿入することを提案した。同年四月十一日、採決が行われ、多数の賛成を得られたが、議長であったアメリカのウィルソン大統領が全会一致を主張したため採択されなかった。このように日本は白人支配の世界の中で、いち早く人種平等を世界に向けて主張していたのである。しかしこうした誇れる歴史を戦後教育の中で教えられることはほとんどない。

さらに先の大戦において、日本はアメリカとの戦争を望まずギリギリまで対米交渉に向けて努力を続けたが、戦争をしないと公約して三選を果たしたルーズベルト大統領がヨーロッパ戦線に裏口から参戦するために、海軍や外交の暗号を解読し日本の手の内を全て知った上で、日本に最初の一撃を打たせるよう、謀略によって日本を追い込んでいった。軍令部総長の永野修身が「戦わねば亡国必至、戦うもまた亡国を免れぬとすれば、戦わずして亡国にゆだねるは身も心も民族永遠の亡国であるが、戦って護国の精神に徹するならば、たとい戦い勝たずとも祖国護持の精神が残り、われらの子孫はかならず再起三起するであろう」と御前会議で発言したように、日本は祖国の誇りを守り、植民地支配を受けていたアジア諸国を解放するためにやむなく戦ったのである。日本は戦争に負けたが戦争の目的は達せられたと言われるのは、日本が宗主国である白人国家と戦ったことで、戦後白人による植民地支配が終焉し、数多

くの有色人種国家が誕生したからである。

一方、大戦末期にはソ連による世界赤化の脅威が高まり、アメリカは議会機密費で密かに開発を進めてきた原爆を日本に対して使うことで、大戦後の覇権を握ろうとした。ソ連や国民党政府の蒋介石、バチカンなど数々のチャネルを使って終戦の意思を伝えていた日本、天皇制の存続が唯一の条件である日本に對して、その回答を曖昧にして時間稼ぎを行い、原爆実験が成功したところでポツダム宣言を出し、事前に一切通常爆弾での空襲を行っていないかった広島と長崎に、ウラン原爆とプルトニウム原爆の二つの異なったタイプの原爆を投下し、その効果を確認した。また原爆だけが非道な兵器ではないことを示すために、一九四五年三月十日の東京大空襲で、一晩で十万人もの民間人を虐殺した。

軍が主張する虚偽の南京三十万人大虐殺説を東京裁判に持ち出して松井石根大将をB級戦犯として処刑し、日本軍が朝鮮女性を二十万人強制連行して性奴隷にしたなどと主張する韓国を支持している。さらに、検閲による日本人の洗脳も行われた。終戦から一カ月後の一九四五年九月十八日、鳩山一郎の「原爆使用は国際法違反」という談話を掲載した朝日新聞に對して、GHQは二日間の発行停止処分を下し、その翌日に三十項目からなるプレスコードを出した。破格の高給で雇われた四千人もの日本人検閲官がこれに従い、新聞、ラジオから出版物、個人の手紙二億通もチェックし、徹底的に思想を統制した。戦時中の日本の検閲とは異なり、検閲に引っかけたものは墨塗りなどでは許さず再印刷となり経費がかかると、出版社や新聞社は自主規制をする傾向が強くなっていった。言論統制が行われたことは秘密とされたが、冷戦が終結してソ連が崩壊し、機密情報が流出したり、アメリカが情報を開示したりするこ

とによって、だんだん真実が明らかにになってきている。にもかかわらず、日本のメディアは未だに検閲官の名簿を報ずることもなくプレスコードを自主規制として守っており、東京裁判史観に沿う報道しか行わない。

私は昨年十二月に、ブラジル日本会議の徳力啓三理事長の招きにより、ブラジル・サンパウロを訪れ、講演を行ってきたが、ブラジルの日系人の方々と話すと、そこには古き日本精神が色濃く残っていることを強く感じた。ブラジルでは日本のような反日教育や反日報道が行われていないため、戦後七十年経ってもなお日本精神が失われていない。

かつて日本は天皇を頂点とする大家族国家であり、戦前の日本では家督相続制の下、長男が家のすべてを相続するかわりに両親をはじめ一族の面倒を見ることが当然のこととされていた。現在、核家族化と高齢化を背景に老人の孤独死が問題となっているが、私は現代社会の中でも孤独死は最も不幸なことの一つであ

ると感じている。戦後の平等相続制度と個人主義教育によって家族は分断され、親の面倒を社会保障制度に委ね、子は自らの責任を放棄する傾向にある。本来「私」がやるべきことを「公」に任せようとしてきたことが、社会保障制度を肥大化させ、財政問題を引き起こしている。日本の良き伝統が戦後失われたのも、戦時中に見せた日本精神に對してアメリカが恐怖心を持ち、占領政策の中で、再び日本が立ち上がれないよう精神的に解体してきたためである。

二〇一二年十二月に第二次安倍政権が誕生して以来、近隣諸国に對して一定の配慮はしつつも、国際社会に對して日本の立場を堂々と主張してきた。いわゆる「南京大虐殺」や「従軍慰安婦強制連行」などの歴史の捏造に對して、政府として反論するようになってきたことは大きな進歩である。昨年十一月に衆議院解散に打って出た安倍自民党政権は大勝し、安倍総理は党内基盤を固め、長期政権への準備は整った。安倍総理は一月五日に

年頭記者会見で、戦後七十年談話に言及したが、早速アメリカから「村山談話」を継承するよう注文が付いた。上下両院で共和党が多数派となりレームダック化したオバマが大統領である間に「戦後レジーム」からの脱却への足掛かりを作るためにも、「村山談話」「河野談話」に囚われず、真実の主張をしていくべきだ。弱い大統領であるオバマの間に主張すべきことを主張し、次期大統領との交渉に上げていけばよいのである。

戦後日本の経済的繁栄は、これまで祖国のために命を落とした多くの英霊の犠牲の上に成り立っている。自虐史観に基づき日本の歴史を貶めることは、我々の祖先を貶めることでもある。戦後七十年を機に、我々日本人が、靖國神社に祀られる英霊への尊崇の念を抱き、改めて歴史の真実に目を向け、祖国に對して誇りを持てるようになるために、私はこれからも事業以上に言論活動に力を入れていきたい。